

臨時受付嬢の恋愛事情 2

Yukino & Kazushi

永久めぐる

Meguru Towa

termity



エタニティ文庫

目次

臨時受付嬢の恋愛事情 2 5

そして二度目の春が来て 281

書き下ろし番外編
ふかふかクッションと賑やかディナー 333

臨時受付嬢の恋愛事情 2

1

—の？ 雪乃？

心地よい声が私の名前を呼んでいる。

誰だろう？ と夢うつつで考えていたら、耳元で「雪乃！」と強く呼ばれ、慌てて飛び起きた。

「へっ？ ……あ、あれ？」

「ずいぶん気持ちよさそうに寝てたね。今日は朝早かったし、少し疲れた？」

「え？ 和司さん、その格好どうしたんですか!？」

いつも下ろしている髪は綺麗になでつけられていて、普段よりも数段落ち着いた印象の彼が、ソファに座っている私の顔を覗き込んでいる。

その爽やかな笑顔に思わず見惚れた。さらに着ている服も普通じゃない。まるで結婚式で新郎が着るような……

「どうしたって言われても……雪乃、もしかして寝ぼけてる？ 今日俺たちの結婚式だろ」

え？

え？

「結婚式……？」

私がぼけつとしてしていると、彼は思いつきり噴き出し、声をあげて笑った。

「緊張してかちかちになってるかと思っただけに、意外と豪胆だね。まさか式直前に、しっかり居眠りしてるなんて思ってもみなかったよ」

ああ。そうか。

そうなんだ。

私、結婚するんだ……

自分の姿を改めて見下ろして納得した。

レースが幾重にも重なり、パールがちりばめられた純白のドレスと、肘を覆うロンググローブ。

これ以上ないほど素敵なウエディングドレスを着ている。

そして近くのテーブルには、白百合をメインにした華やかなブーケ。

状況を把握すると同時に、眠りこけていた自分が恥ずかしくて顔が赤くなった。

「私ったら……！ ごめんなさい」

いつものクセで両手を頬にあてようとして、慌てて下ろした。

不用意に触っちゃダメ！ 手袋がファンデーションで汚れちゃう。

「気にしない。俺も少し緊張してみたいだ。笑ったら肩の力が抜けたよ。ありがとう」
 そう言いながら私の両手を握る。彼の手の温もりは手袋越しでも感じられた。

私は視線を逸らすことなく彼の目を見つめながら思う。

これからはずっとこの人と二人、一緒に生きていくんだ。ああ、何て幸せなんだろう。

「——綺麗だよ、雪乃」

身を屈めた彼の口からため息のようなささやきがこぼれる。次の瞬間彼の唇が頬に軽く触れた。くすぐったさに首をすくめながら、これ以上ないくらい満ち足りた気持ちに包まれて泣きそうになる。

「ほら、泣かないの」

優しい声が涙ぐみそうになった私をたしなめ、もう一度暖かい唇が頬をかすめた。

そんなふうによろしくされたら、もっと泣きたくなっちゃう。

やめてほしいと思っただけれど、その温もりが心地よくて、私は何も言わずに彼のキスを受ける。

「——そろそろ時間だ。先に式場で待ってる。早くおいで、雪乃。俺のところへ」

最後に額にキスを落として、彼は控室を出て行った。

彼と入れ替わりにやって来た介添えのスタッフさんから、そろそろ時間だと告げられた。

先導してくれる彼女に付いて進み、途中で父と合流する。お互いに緊張をほぐそうと軽口を叩き合いながら歩いているうちに、あっという間に扉の前にたどり着いた。

私は父の腕をしっかりと取って、深呼吸を一つ。

この扉の向こうはバージロード。その先で彼が待っている。

スタッフさんがゆつくりと目の前の大きな扉を開ける。

木製の重厚なそれは軋みもせず、滑らかに開いていく。

赤い道の先の祭壇の少し手前。ステンドグラスから降り注ぐ光の中、背筋を凍と伸ばした彼が、私を見ていた。

パイプオルガンの清浄な調べが流れる中、私は父と一緒に一步を踏み出した。彼に向かっ

「雪乃！ 雪乃！！ そろそろ起きなさい！ 待ち合わせに遅刻しても知らないわよー？」

バタン！ と乱暴にドアが開いて、母が呆れたような声で急かしている。一瞬何が起

こったのかわからなくて、反射的に飛び起きた。それからゆっくりと思考をめぐらせる。彼と結婚式を挙げるというあれは……

「夢か……」
「がっかり。」

「なにぶつぶつ言ってるの？ 早く朝ご飯食べちゃいなさい」

「はい」

母に返事をしながら私はベッドから下りた。

ぼーっとしながら身支度を整えていると、さっきの夢がふいに頭の中をよぎって頬が熱くなる。これから和司さんと会うのに、しかも（私のじゃないけれど）ウエディングドレスを見に行くのに、何であんな夢見ちゃったかなあ。いや、今日の予定があつたからこそ見ちゃったんだろうけど……。顔を合わせにくいというか、妙に意識しちやいそうで困る。

昨夜のうちに今日はこれを着ようと決めていたワンピースに着替えながら軽く首を振って、いたたまれない気持ちを追いつと試みる。

——すぐには無理だ。けど、とにかく考えないようにしていれば、落ち着くかもしれない。

「とりあえず朝ごはん、だよね！」

わざと独り言を口にして、私は自分の部屋を出た。ドアを閉めるときにちらりと見えたる窓の向こうには、白い雲が浮かんだ夏らしい青い空が広がっている。今日も暑くなりそうだ。

2

待ち合わせ場所の駅前広場には、夏の日差しが燦々と降り注いでいた。

当然のことだけど、暑い！

でも、今の私はそんな暑さも吹き飛ばぶくらい、そわそわしている。どうにも落ち着くことができなくて、また服装チェックをする。これで何度目になるだろう。

この前、彼が似合うと褒めてくれた淡いブルーの小花柄のワンピース。

梅雨明け宣言が出た日、店頭で一目惚れした大きめなりボンがついたミュール。バッグはミュールと同じベージュ色。……たぶんおかしところはない、はず。

周りには、私と同じようにそわそわした、人待ち顔の女の子も多い。流れる汗を拭いたり、扇子であおいだり、していることはみんなバラバラ。

でも、待つのも楽しいって顔をしていることは共通している。

きっと私も彼女たちと同じような顔をしているんだろう。そう思うと、自然と笑みがこぼれた。

しかし！ やっぱり！ 暑い！

到着して数分しか経っていないのに、首筋から一筋、汗が流れ落ちた。

むず痒い^{がゆ}感触が嫌ですぐにハンカチで拭^{ぬぐ}う。

「早く着いたら近くで涼んでいて」と言っていた和司さんの言葉に甘えて、近くの喫茶店にでも入っちゃおうかな？

そう思って周りをきよろきよろ見回していたら……

「先に着いたらどこか店に入って涼んでいるように、って言ったろ？」

突然、背後から耳元でささやかれた。

「ひゃっ!？」

耳を押さえて思わず飛び退こうとしたけれど、周りにはたくさん人がいる。いきなり飛び上がったらしらうしろの人に迷惑だ。慌てて止めようとしたらバランスを崩してしまった。

「——っと！ 危なっかしいなあ、雪乃は」

とっさに私の体を引き戻してくれる強い腕。そして、私の背後にいた人に代わりに謝ってくれる涼やかでよく通る声。

「和司さん」

そこには私の待ち合わせ相手、館花^{くわんげ}和司さんが立っていた。道行く人が思わず振り向くほど端正な顔立ちで魅力的な彼が、からかい交じりの微笑を浮かべて私を見下ろしている。

彼は会社の先輩で、月並みな言い方をすれば、私の「彼」だ。

容姿端麗で仕事の能力も超一流、そして人望も厚い。

そんな完璧な彼が、どうして平凡な私——佐々木^{ささき}雪乃と付き合うことになったのか。それは、病欠した社員の代わりに私が臨時で受付を担当したことがきっかけ。持ち前のドジっぷりを発揮して、お客様の前で盛大に転ぶわ、スカートは破くわ……の大失態を演じてしまった私を救ってくれたのが、和司さんだ。

付き合いはじめた時期については見解の相違があつて、彼と私では若干^{じやうかん}異なるけれど、約三か月のお付き合いになる。

「お待たせ。暑かったでしょ？ まだ時間もあるし、どこかで涼んでいこうか」

爽やかな微笑みと共に差し出された手を、思わずじっと見つめてしまった。

この手を初めて取ったのは、春とは名ばかりのまだ寒い頃。

社内^{しゃい}の有名人で将来を囑望^{しゆくぼう}されている和司さんと私とでは不釣り合い。そう思っていたから、最初の頃は彼の気持ちが信じられなくて、逃げ回ってばかり

だった。
不釣り合いだと思っていたのは私だけじゃない。同じように思う彼に心を寄せる女性から、嫌がらせを受けたりもした。

でも、じっと待ってくれた和司さんや応援してくれた友人たちのおかげで、私は差し伸べられた彼の手を取ることができた。

そうして、気が付けば季節が一つ過ぎていた。ずっとずっと遠いと思っていた人が、今では一番近くにいる。あの頃のように戸惑うことも躊躇することもない。

「あれ？ 雪乃？ どうしたの？ 手、繋ぐの嫌だった？ やっぱり暑苦しいかなあ」
困ったような声が聞こえて我に返った。

私の方に差し出したまま、宙ぶらりんになっている手を持って余した彼が、戸惑い顔をしている。

「違います！ —— 大きい手だなあって思ってた」

誤魔化し半分、本気半分で彼の手を掴んだ。自分の手のひらと、彼の手のひらを合わせて大きさを比べてみる。

「ほら！」

まるで大人と子どもの手のように違う。これだけ大きさが違うと、やっぱり色々と感じて違うんだらうか？ そんなことが面白くて、手首側を合わせてみたり指先を合わ

せてみたりして遊んでいたんだけど、いつも饒舌な和司さんがやけに静かなことにふと気付いた。

不思議に思っで見上げると、なぜか彼は口元を手で覆ってそっぽを向いている。

あれ？ 彼の中で何が起きてるんでしょうか？

「和司さん？」

どうしました？ と続けようとしたのに——

「——そろそろ行くよ」

和司さんは強引に私の手を掴み、ぐいぐい引つ張って歩き出した。

私はなにか引きずられるように付いて行く。

「わっ!? 何ですか、和司さん！ 和司さんってばー！」

「何でもないって！」

えーと。これはもしかして、和司さん、照れてる？ なんて？

手を引つ張られながら「珍しいこともあるなあ」なんてにやにや笑っていると、横目でぎろりと睨まれたので、慌ててそっぽを向いて誤魔化した。

和司さんの選んだお店はそこそこ混雑していたけれど、でも、不快ってほどじゃなかった。

慌てて選んだとはいえ、そこは何ととっても目の肥えた和司さんのことですから。私好みのお店でした！

和司さんはアイスコーヒーを、私はアイスジャスミンティーにドライフルーツがいっぱい練り込んであるパウンドケーキ。

パウンドケーキ、美味しそうだと思っただけ我慢するつもりだったの、本当はね。でもね！

「遠慮しないで食べなよ。食べないで後悔するより、食べて後悔する方がよくない？」っていう和司さんの悪魔のささやきに負けた。完敗、でした。

まあ、ケーキはとても美味しかったので、結果的には誘惑に負けてよかったかなって思っているけれど。

「今日は付き合わせちゃって悪いね。断ってくれてよかったのに」

どことなく不満そうなその声に、私はケーキの載ったお皿から顔を上げた。

向かい側に座った和司さんは、頬杖ほおづえをついてゆるく姿勢を崩しながら唇くちびるを尖らせている。

「俺は雪乃と二人っきりでデートの方がよかつたんだけどね。まったく兄貴にも困ったもんだよ。俺たちの邪魔でもしたいのか？」

和司さんのお兄さんは館花政義かたはまさよしさんという方で、和司さんと私が勤務する会社の親会

社である『フォアフロント・コーポレーション』の専務だ。

社長であるお父様と、会長であるお祖父様のサポート役を務めているらしい。

先日、うちの会社に視察にいらした際は、私がアシスタントを仰せつかった。仕事に真摯しんしな方で、私も厳しく指導していただいた。

外見や言動から誤解されがちな方だけれど、本当は面倒見がよくて優しい。

館花専務は、私の憧れの先輩であり友達でもある加瀬かぜひとみさんの婚約者だったりする。館花専務と加瀬さんが付き合っているって聞いたときは驚いた。けれど彼と一緒に仕事をするうちに、加瀬さんが専務を選び、専務もまた加瀬さんを選んだことにもすごく納得した。

二人はとて強い人たちだ。そしてお互いを信頼していることが、傍たがから見てもよくわかる。

きつと自分の背中を預けるならこの人って思ってるんだろうな。

そんな関係が羨うらやまましくて、私もいつか和司さんとあんな風になれたらいいなって思っている。

和司さんは専務のことになると途端に辛口になる。

現に今だって私の目の前で眉をひそめながらアイスコーヒーを飲んでいる。でも本当は、その不機嫌さは仲がいいことの裏返しで、単なる照れ隠し。

それがわかってるから私は気にならないけど、知らない人から見たら、兄弟仲が悪そうに見えるんじゃないかな？　なんて、つい余計な心配をしてしまう。

「私はすっごく楽しみにしてたんですけど……」

「いや、俺だって嫌じゃないんだよ。ただ兄貴と一緒っていうのがなあ。ひとみさんだけ来ればいいのに」

和司さんが小さい声でぶつぶつと呟つぶやいている。

いやいや、それは無理でしょ！　心の中で盛大に突っ込みを入れつつ、私は苦笑した。「和司さん、さすがにそれは……」

「わかってるって」

今日は加瀬さんのウェディングドレスを選ぶ日で、私たちはそのお供をさせてもらうことになっている。そろそろ決めなければいけない時期なんだそうだ。

そんな大切なときに専務が来ないなんてありえない。館花専務って一見「仕事が一番大事」って人に見えるけど、実はかなり「加瀬さんが一番大事」な人だったりするから。というわけで、いくら和司さんが「来るな」と言ってもそれは無理な相談だし、そもそもおまけなのは私たちの方だ。

「政義さんと二人で選びに行っても味気ないじゃない！　雪乃ちゃんも来てよ！」
という加瀬さんの一言が発端だ。

で、「雪乃が行くなら俺も行く！」と和司さんが言い出して、結局今日は四人で加瀬さんの友達が経営するブライダルサロンにお邪魔することになった。

だから、本当はさつき和司さんが口にした「兄貴にも困ったもんだ」云々は、ただの言いがかり。専務を相手にするときの和司さんは、意地っ張りの子どもみただ。

ゴールデンウィークを使って、両家に挨拶に行くと言っていた館花専務と加瀬さんは、その後とんとん拍子に話が進んで、今年の秋に結婚式を挙げることになった。

準備期間は半年。じつくりタイプの専務にしては、ちょっと性急だと思う。和司さんにこっそりそう漏らすと、「ああ見えて兄貴もせっかちなんだよ。ブライベートではね」と笑っていた。

兄貴「も」という彼の言葉に、笑いを堪こらえられずに噴き出した。二人の似た者兄弟ぶりは薄々感じていて、やけに納得してしまった。

他愛もないおしゃべりをして涼んでいるうちに、館花専務と加瀬さんとの待ち合わせの時間が迫って来ていた。

「そろそろ待ち合わせの時間じゃないですか？」

「ん？　ああ本当だ。じゃあ、そろそろ行くかうか」

時計を確認した和司さんが立ち上がり、私もそれにならって席を立った。

外に出た途端に息苦しいくらいの熱気と湿気が襲ってきて、冷房で冷えたはずの全身

に汗が滲んだ。二人との合流場所はブライダルサロンの前。ここから五分ほど歩いた場所だ。

加瀬さんはゴージャスな雰囲気的美女だから、きつとどんな難しいデザインのドレスでも華麗に着こなしちゃうだろう。そんな彼女のウエディングドレスを選ぶ過程を見られるなんて、すごくわくわくする。

「和司さん、急ぎましょ！」

早く行きたくなった私は、和司さんを急かした。

「楽しそうだね、雪乃。じゃあ君の仰せのままに急ごうか」

和司さんは、私の手を掴むと足早に歩き出した。形勢逆転。私が彼の後を慌てて追う形だ。

「わ!？」

慌てる私の耳に、彼の楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

白、白、白。

白で統一された店内には、たくさん白いドレスと小物たち。

すべて白なのに、どれ一つとして同じじゃない。黄色がかった白、青みがかった白、ピンクがかった白に、きらきらと虹色に光る白……

眺めているだけで幸せな気持ちになるドレスたち。窓から入る日の光と柔らかい色の照明が、それらを一層際立たせている。

でも、一番に私の目を惹きつけているのは、上品で洗練された店内の様子じゃない。目の前にいる加瀬さんだ。

「すっごい、綺麗……」

うっとりを通り越して呆けたように眩いた。今日の私は、こんな言葉を幾度となくこぼしている。

「そう？　ありがとう」

にっこり笑った彼女の魅力に、頬が熱くなった。私でもくらくたと来たんだもの。婚約者の専務はさぞかし……と思って、彼の方をちらっと盗み見ると、なぜかものすごく不機嫌そうな顔で腕組みをしている。

あれ？　っと思っただけど、専務の隣に並んで座っていた和司さんがにやにや笑いながら専務の方を見ているので、何となく察しがついた。

——あの不機嫌そうな顔は、専務の照れ隠しなんだ。

同意を求めるように加瀬さんを見ると、彼女はいたずらっぽく肩をすくめた。

私の思ったことはやっぱり正解だったみたい。

「で、雪乃ちゃん。これどう思う？　さっき試着したマーメイドラインの方がいいかし

ら?」

いま彼女が試着しているドレスは、Aラインのシンプルなドレスだ。体をくるりと一回転。風をはらんで、ドレスの裾がふわりと広がる。

その軽やかさに目が惹きつけられた。ウェディングドレスって幸せの象徴って言うけど、本当にその通りだなあって、しみじみと感じる。

今は夏の盛りだけど、加瀬さんがウェディングドレスを着るのは秋の日差しの下だ。

優しい秋晴れの空の下、いつも通りの表情を崩さない専務（でもちよつと照れくさそうな雰囲気が見え隠れしてて）、そして陽の光も、色付く木々もかすむくらいまばゆい加瀬さん。

教会の階段をゆっくり下りて来て、大勢の参列者がフラワーシヤワーかライスシヤワーを——そんな想像をめぐらせていたらうっかり返事を忘れてしまった。

「雪乃ちゃん? どうしたの?」

黙り込んだ私の顔を、加瀬さんが不思議そうに覗き込む。

間近で見られて慌てて我に返る。空想の世界に浸ってたのを誤魔化すように「何でもなし」と首を横に振った後、正直な感想を口にした。

「さっきの、こっちのも似合いですぎて」

正直なところ、どっちがいいかなんて、選べない。マーメイドの前に試着したプリン

セスラインだって似合ってたし。

ああ、でも。加瀬さんの優雅さを際立たせるなら、やっぱりマーメイドな気がする。

さっき彼女がそれを身に着けて更衣室から出て来たときの、目の覚めるような感覚を思い出した。

もちろん今試着しているドレスも素敵だけれど、何となく、ほんの少しだけインパクトに欠ける。

「さっきの、あのマーメイドドレスのデザインをベースにして、細かいところを変えるのってできますよね?」

形は加瀬さんにぴったりだったんだけど、細かいパーツが彼女のイメージじゃないなって感じがした。そこをもうちよつと大人っぽいものに変えたらぴったりなんじゃないかな。

「できるわよ。オーダーメイドのつもりだし」

そう。彼女の希望は既製品でも、セミオーダーでもなく、フルオーダー。

それはあらかじめ決めていたらしいんだけど、どんなドレスがいいか具体的なイメージは全然固めていなかったんだそうだ。

そういうわけで、イメージを固めるためにお店にあるドレスをあれこれ試着させてもらっている。

「形はマーメイドがいいなあって、私も思ってたのよね。決めちゃおうかしら。——ねえ、ちよつといい？」

加瀬さんは、少し離れたところに控えていた女性に声をかけた。

「なあに、ひとみ」

くだけた調子で返事をした彼女は、このお店の店長兼デザイナーさんで、加瀬さんの学生時代からのお友達だそうだ。

加瀬さんが結婚するときは彼女がウェディングドレスを作る。昔、そんな約束をしたんだって。

二人の姿を眺めながら、私は小さく感嘆のため息をついた。友情っていいなあ。

「形はさっきのマーメイドを基本にしたいんだけど」

店長さんは自信に満ちた顔でにこりと笑った。

「わかったわ。じゃあ、詳しいことはあちらで相談しましょうか？」

彼女は窓際の方を示した。

そこには大きめのテーブルが置かれている。たぶん打ち合わせ用だろう。資料や素材のサンプルをたくさん載せられるように、とても広い。でも、それだけ大きいのに、全然お店の雰囲気損なっていない。

「じゃあ、このドレス脱いでくるから、雪乃ちゃんは先に座ってて」

さらりと言われて軽く返事をしそうになっちゃったけど、でも、それってどうなの!?

「——あの、私がそこまで参加してしまっただけですか？」

恐る恐る尋ねると、加瀬さんは心配ないと笑い飛ばした。

「いいに決まってるじゃない! こういうのは女同士でワイワイ言いながら決める方が楽しいわ」

気さくすぎる加瀬さんの言葉に不安になり、私は男性陣——館花専務と和司さんの方を見た。

「私はそういう事に疎いんでな。代わりによろしく頼む」

専務はお手上げだとも言いたげに片手を上げて、苦笑いを浮かべる。

そう言われてしまうと断るのも申し訳ない気がしてくる。

それに正直言って、加瀬さんのドレスと一緒に選べるのは嬉しい。

だけど本当に、私が出しゃばったりしていいのだろうか。

「兄貴が行くより雪乃が行った方が、ひとみさんの役に立てるんじゃない? 素敵なドレスを作って、兄貴をびっくりさせてやってよ」

和司さんが茶化しながら背中を押してくれる。私はそれに甘えることにした。

加瀬さんが着替えている間、私は案内された窓際のテーブルで、ぼんやりと外を見て

いた。街路樹が緑の葉を茂らせている。こうして空調のよく効いた店内にいれば快適だけれど、外を歩き交う人々は暑さに辟易した顔をしている。

さつき外を歩いていた私たちも、あんな顔をしてたんだろうか。

店長さんは色々な素材のサンプルを集めている最中。少し離れたソファでは館花兄弟が何か話をしている。二人の表情はリラックスしているものの、どこか真剣な雰囲気もあった。

きつと、仕事関係の話でもしているんだろう。

なら、邪魔しては悪いよね。私はまた窓の外に視線を戻した。

テーブルの上に置かれたアイステイーの氷が、からんと涼しげな音を立てた

添えられていたストローで軽くつつくと、また涼しげな音が立つ。けれど、自然に崩れたときのような透明感がない。

暇にまかせて、どうやったら綺麗な音がでるのか、なんて子供じみた挑戦をしていると、加瀬さんと店長さんがほぼ同時にやって来た。

「ひと雨来そうね」

と言いながら、加瀬さんが私の隣の椅子に腰を下ろした。

「そうねえ」

ため息交じりに、店長さんが加瀬さんの真向かいの席につく。

二人の会話につられて見上げた空には、ついさつきまではなかった暗雲が、すごい勢いで広がり始めていた。

加瀬さんと店長さんと私の三人で話し合いつつ、デザインや素材を一つひとつ決めていく作業は楽しくて、心が弾んだ。

大体のことが決まって、後は引き取りや支払いなどの事務的なことを残すばかりになったところで、私は席を外した。私の座っていた席には館花専務が座り、私と和司さんは店内を見て回ろうと、一階に下りることにした。

一階には既製のドレスや小物が置いてあって、上の階に比べれば気軽に立ち寄れる雰囲気がある。

先ほどから降り始めた雨のせいかな、店内は思いのほか混雑していたけれど、だからと言って不快に思うほどでもなかった。

マネキンが身につけている豪華なドレスやベール。品良くディスプレイされている小物たち。そしてたくさんのドレスがところ狭しとハンガーに吊るされている。

素敵なものばかりでどこから見て回ろうか迷ってしまった。助けを求めるように和司さんを見上げると、彼は「雪乃の好きに見て回っていいよ」と笑う。

それなら一番手近なところから順に見て回ろうかな。特に必要なものがあるわけじゃ

ないしね。

ブライダル用品が必要になるのは……と、そこまで考えたとき、例の朝の夢が脳裏にぼん！と音を立てて蘇よみがえってきた。夢の中の、フロックコートを着た和司さん、格好よかったな……じゃなくて！

「どうしたの、雪乃？ 急に黙り込んだじゃって……疲れた？」

不思議そうに顔を覗き込まれると、なおさら動揺してしまう。

「いや、そういうわけじゃないんです。ちよつと考えごとしちゃって」

あははと笑って誤魔化した。いつの間にか止まっていた足を動かして、一番目立つ場所に展示されているドレスの前に立つ。

「うわあ」

感嘆の声が口をついて出た。そのドレスが、思わずため息が出るくらいに綺麗で、可愛らしかったから。

Aラインのそのドレスは、雪のように白い生地の上に生成色きなりいろの繊細なレースを重ねて縫製ほぎせされていた。さらにその上から銀糸で刺繍ししゅうが施ほどこされて、パールが縫い付けられている。袖は長袖で、その部分だけはレース生地のみで作られていて、カフス部分にはパールのボタンが並んでいる。ウエストで切り替えられたスカートには、上半身と同じレースの生地が幾重にも重ねられ、うしろ側が長く裾すそを引く形になっている。

クラシカルで柔らかな印象の素敵なデザインだ。

夢に出てきたドレスと少し似ている。あつちは確かノースリーブだったけど。

いいなあ。いつかこんなドレス着てみたい……

「雪乃、それ着てみたら？」

頭の中で空想に浸っていたら、いきなりそう言われて我に返った。

というよりも、飛び上がったと言った方が正しいかもしれない。

え!? えええええー!! え、こ、これを!? 私が試着するの!? 無理無理無理ー!!

着てみたくないわけじゃない。むしろ着てみたい。けど、でも、物のついでみたいな感覚では着たくないな。

考え方が固いつて笑われちゃうかもしれないけど、ウエディングドレスを試着するのは、結婚が決まったときにしたい。

断ったら残念そうな顔をされたけれど、それ以上は勧められなかったからほっとした。そのドレスの横に並んでいたフロックコートが格好よくて、和司さんによく似合いそうだった。本当は着てみてほしかったんだけど、自分も試着を断った手前「あれ、着てみてください！」とは言い出せなかった。頭の中でフロックコートを着た和司さんを想像するだけにとどめた。

加瀬さんたちと別れて、和司さんと連れ立って街を歩く。この後の予定は特に決めていなくて、私たちは何となく最寄り駅方面に向かっていた。

通り雨が過ぎても、結局全然涼しくならなかった。むしろ湿気が増した分、息苦しさが増した感じがさえる。

でも、千切れた黒雲の間から広がる夕陽は悪くない。街並みを、輝くような金色に染めている。

つま先のあいたミュールで来たことを後悔しつつ、夕陽を受けて金色に光る水たまりを避けて歩く。

「仕上がりを楽しみですね！」

さっきの打ち合わせの興奮が尾を引いて、私の気分はまだまだ高揚中。

少しうしろを歩いて、和司さんを振り返って笑いかけた。

「ああ」

和司さんが穏やかな笑顔でうなづく。

「雪乃は……」

そう言ったとき、彼は何かを逡巡するよう目線を横に逸らし、「やっぱり何でもない」と口をつぐんだ。

言葉を途中で濁されることほど気になることはない。

「すごく気になりますけど！」

「大したことじゃないよ。それより、これからどうする？」

はぐらかされた感、満載だ。けど、和司さんはこうと決めたらなかなか撤回しないし。

こんなところで言い合っても仕方ないよね。

彼が大したことじゃないと言うなら、そうなんだろう。そういうことにしておこう。

「何をするにも中途半端な時間ですよね……」

明日は月曜日で会社があるけれど、だからって日が落ちないうちに帰宅するなんて、

早すぎる。

なので、このまま帰るのは却下。夕ご飯……にも、ちょっと早い。

考え込む私の頭に、和司さんがぼんと手を乗せた。

「このあたりは滅多にこないし、散策してみようか？ 気になる店があったらそこでお

茶でもしよう」

「はい！」

「じゃあ、決まり」

和司さんがすっと手を伸ばす。私はその手を何の躊躇いもなく握った。今度は和司さんが私を引っ張るように、ちよっとだけ先を歩く。肩越しに見える横顔。見ていると、心が落ち着く。

やっぱりこの角度から見ると彼の顔が好きだな。

「どうしたの？」

前を向く彼の顔をじっと見つめてたら、悪戯いたずらっぽくそう尋ねられた。ばれてみたい。視界の端に私の姿も入ってたのかな。

「な、何でもありません！ それより、ですわね。あの、早く行きましょう！」

早くも何も、特にあてもなく散策するだけなのにね。自分自身に突っ込みを入れたいくらい見え見えの誤魔化しに、和司さんは眉をあげて「了解」と笑う。

視線を前方に戻した途端、彼が小さくため息をついた気がした。それは本当にかすかなため息で、もしかしたら私の気のせいだったんじゃないかって思った。

けれど、そっと見上げた和司さんの横顔は、どことなく迷うような色を滲にじませていて、それがやけに気になった。



雪乃とひとみさんがドレス選びを始めると、兄貴と俺は本格的に蚊帳かやの外になった。店員にすすめられた席に並んで座り、供されたアイスコーヒーを遠慮なく飲む。

さつき喫茶店で涼んできたばかりだ。しかし、そのときに摂取した水分など、炎天下

を歩くうちに汗になって消えた。

グラスの三分の二を飲んで、やっとなどと心地ついた俺は、テーブルにグラスを戻した。

「なあ、兄貴。任せっぱなしでいいの？」

「門外漢もんがわんが口を出しても、邪魔なだけだろうが」

呆れたような答えが返ってきた。

「まあ、それもそうか」

背もたれに体を預けてのんびりと店内を見渡した。雪乃たちは少し離れたところで何やらおしゃべりをしている。内容までは聞こえてこないが、雪乃が楽しそうに微笑んでいる様子が見える。

「華やかでいいなあ、ああいうの」

間違っても男兄弟じゃ、あんな風になんて言われない。むさ苦しいだけだ。

「おい和司、イヤらしい目つきになってるぞ」

「——ふざけんな。どっちがだよ、どっちが」

むっつり顔で内心にやけてるあなたには言われたくないね。

チラリと横目で見て鼻で笑うと、余裕の笑みを返されますます癪しゃくにさわる。

これ以上何を言っても余計からかわれるだけだ。面白くない。

「ところで兄貴、最近そっちの会社はどう？」

「ん？ ああ。あまり変わりはないな」

「順調ってことか？」

「まあそういうことだ」

それきり話が續かず、沈黙に包まれる。いつもはそのまま黙っていることが多いが、何やら居心地悪そうな気配が漂ってきた。

不思議なこともあるものだ。兄貴は膝の上で組んだ自分の手をじっと見つめている。

居心地が悪そうというよりも、何かを躊躇ためらっているように見える。普段から仏頂面の不愛想で感情を読み取りにくいのが、俺だって腐っても家族だ。そのあたりを見間違うことはない。

何かあったのか？

しかし、兄貴が順調と言ったら順調なはずだ。多少の雑事が起こったとしても、それは兄貴の手の内で何とかなるレベルのものであったり、もうすでに手を打ち終えて結果待ちだったりするのだ。

少し水に向けてみようかと思った矢先、兄貴が口を開いた。

「そろそろ親会社ごちちに戻ってくる気はないか？」

兄貴はこことは違う場所を見るような目で遠くを見ている。

「私は頃合いだと思っっているんだがな」

俺自身、それを考えないこともなかった。黙り込んだ俺に対して、穏やかな口調で兄貴はさらに続ける。

「お前の考えを聞きたいんだが、どうだ？」

「俺は……父さんたちを手伝えたらいいと思ってる。それは昔から変わらない。だけど、迷ってるんだ。そっちに戻って、俺にできることはあるのかって」

「それは、戻る気はないということか？」

兄貴の問いに俺は曖昧あまいにうなずいた。『フォアフロント・コーポレーション』を離れようぜいぶん経っている。

当初思っていたよりも、ブランクは大きい。少なくとも俺はそう思っている。

「なら俺の下につかないか？ 技術にも営業にも明るい補佐がほしいんだ」

「はっ!？」

思わず頓狂とんきやうな声が出た。まさかそんな展開になるとは思っただけだった。

「何だ、不満か？」

「い、いや、そういうわけじゃ、ない……」

不満どころか、むしろそうならいいのにと思っていた。

だが、それを誰かに話したことなどないので、いきなり切り出されて驚いただけだ。

「なら考えておいてくれ。早めに返事をもらえればありがたいが、まあ、よく彼女とも

相談するといひ」

「わかった」

すぐに諾と答えるべきだと頭ではわかっている。なのに、言えなかったことに自己嫌悪を覚えた。答えを躊躇った理由は一つ。

目が雪乃を追った。彼女は窓際の大きなテーブルに一人ぼつんと座り、頬杖をつきながら所在なさにグラスの水をストローでかき混ぜている。

俺の視線に気づいた彼女が小さく手を振りながら笑いかけてきたので、同じ仕草で応えた。

そう。俺は彼女と離れるのが嫌なんだ。ただそれだけで、進むことを迷うなんてな。俺はどれだけ大人げないんだか。

小さなため息をつくとき、それが聞こえたのか、隣の兄貴がぼつりと呟いた。

「心は理屈で割り切れるものじゃない。気にするな」

まるで俺の心を見透かしたかのような慰めの言葉を口にした。

まさか、この堅物の兄貴もそう感じる時があるのか……？

意外に思ってた隣を覗き込むと、冷たい目がぎろりと俺を睨んでくる。凶星のようだ。

折しも、ひとみさんが雪乃のもとに戻り、ふたたび華やかな会話が始まったところだった。

からかわれることに慣れてない兄貴を怒らせると、後々厄介だ。それ以上追及するのは諦めて、俺は窓の外を眺めることにする。

少しあたりが暗くなったと思ったら、いつの間にか空は不穏な黒雲に覆われていた。

ひと雨来そうだと思う間もなく、雷鳴が轟き、店内のあちこちから小さな悲鳴があがった。

窓際のテーブルにいた雪乃たちも驚いた顔をしていたが、どうやら雪乃もひとみさんも、ひとみさんの友人だというこの店の店長も、パニックを起こすほど雷が苦手というわけではないらしい。

しばらく窓の外を眺めながら何かを話していたが、また元のようにドレスの相談へ戻っていた。

「雷、平気なんだね」

兄貴に話しかけたが、どうやら意味が通じなかったらしい。最初は何を言ってるんだという顔をして、それから俺の視線の先を見て「ああ」とうなずいた。

「いいことじゃないか。雷のたびに騒がれてもかなわんからな」

そんな憎まれ口が戻って来たが、どうせひとみさんが雷が苦手だったら、それはそれで「普段気丈なのに、雷が苦手なんて可愛いじゃないか」ぐらいは思ったりするんだろう。それから兄貴とひとしきり他愛ない雑談をしているうち、ようやく相談がまとまった

らしい女性陣に呼ばれた。兄貴と俺は彼女たちに合流すべく中身のあまりない話を打ち切った。

兄貴たちが予算や納期などの打ち合わせをしている間、俺たちは店内を見て回ることにした。

ドレスの展示フロアに向かうと予想以上の混雑具合に驚く。ひしめき合っているというわけではないが、様々なカップルで賑わっていた。

突然の豪雨に遭遇し、雨宿りも兼ねて入店した人が多いということか。

レジ横や店の片隅に置いてあるパンフレットを手に取り、熱心に読んでいるカップルも少なくない。

店員たちは笑顔も柔らかい物腰も崩さず、だが忙しそうに動き回っている。

雨に見舞われたのが発端で結婚を意識し出すカップルがいなくても限らないよなあ。

豪雨というのは厄介なばかりでなく、意外なところで意外な効果をもたらすのかもしれない。

そんなことをつらつらと考えながら、俺は楽しそうにドレスや小物を眺める雪乃から目を離さないでいた。何かに気を取られて転ぶんじゃないかと心配だから……というだけじゃない。

目を輝かせながらドレスや小物を眺める彼女が、いつも以上に可愛らしく見えたからだ。

この感情が、店の華やかな雰囲気と周りの人々が生み出す妙に熱っぽい空気にあてられたせいだというのなら、それはそれで構わない。幸せそうに笑う彼女を眺めることが、俺の幸せなんだ。

ふらりふらりと歩き回っていた雪乃が次に足を止めたのは、フロアで一番目立つ場所に飾られたウェディングドレスの前だった。

呆然という言葉が一番相応しい顔で、無機質なマネキンがまとうドレスを見上げていた。笑うこともはしゃぐことも忘れている。今までとはまったく違った反応を見せていた。きっとこのドレスは彼女の好みのど真ん中なんだろう。

清楚さをまったく失うことなく、豪華さを備えたドレスだった。雪乃にきつとよく似合う。

新緑の中、このドレスを着て微笑む彼女——そんな光景が脳裏に浮かんだ。

それが空想でもなんでもなく、現実のことになればいいのに。

「そのドレス、気に入ったの？」

「はい。綺麗ですよねえ」

ドレスから視線を外すことなく、彼女はため息交じりにうなずいた。

「着てみたら？」

「えっ!? いや、いいです。試着なんてそんなっ! 汚したり破いたりしたらどうするんですか!？」

あまりの慌てっぷりに、俺の方が驚いた。なぜ、そこまで動揺するんだ!？」

このドレスを着た彼女をちょっと見てみたい。そんな軽い提案だったのに、雪乃は赤くなった頬ほほを両手で覆おおいながら、目を泳がせている。

「試着できるか聞いてみて、可能なら着てみればいい。試着してる人結構いるよ？」
苦笑いしながら告げると、雪乃は困ったような顔をした。

「でも、冷やかして試着してみるなんて、ウエディングドレスに失礼な気がしません？」

ドレスに失礼!? なんだそれ? ドレスは確かに特別なものではあるけれど、それでも物だろう!？」

目を丸くする俺を見て、彼女は不思議そうにしているが、そういう顔をしたのは俺の方だ。

「そんなもののなの?」

改めて尋ねてみると、彼女は少し首をかしげて、それから小さくうなずいた。

「私の場合は」と前置きをして理由を話す。

「ウエディングドレスはやっぱり花嫁さんのものだと思うんです。たとえ試着でも、そ

ういう予定がないのに着るのは、気が引けるかなって」

花嫁のもの……か。

彼女に自覚はないんだろうけれど、俺にとってその言葉はとても残酷に響いた。俺との結婚なんてまったく考えていない——そう言われているような気がしたからだ。

彼女の言葉は言い知れぬ感情を俺の中に巻き起こした。

それは、兄貴たちと別れて二人きりの時間を楽しんでいる間も、雪乃と別れてからも、心の片隅に小さな棘とげのように引つかかったままだった。

それどころか一人になってみると、そのときに生まれた得体のしれない気持ちは不安や焦りに変わっていった。

兄貴から話のあった『フォアフロント・コーポレーション』へ戻る話と相まって、考えれば考えるほど、「このままでいいのか?」という気持ちきもちが湧き上がってくる。

戻ったら、今までのように彼女と頻繁に会うことはできなくなる。それこそ何日も何週間も会えない日々が続くかもしれない。

今のままの関係で、そんな遠距離恋愛のような状態を続けて大丈夫だろうか。

雪乃を信頼していいわけじゃない。だが、人の心は移ろいやすいものだ。恋心なんでものは特に……

彼女との約束がほしい。そう、絆きずなにすることができるといふ約束が。

和司さんの迷いの原因は、その後しばらくして判明した。

『話があるから、仕事が終わったら会いたい』

という簡素なメールを受け取ったのは、週もなかばの朝の通勤電車の中だった。

あと数十分で会社に着くんだし、そのとき直接言ってくればいいのに。

と思つたら、今日は親会社の方に直行するんだって。ああ。だからか。

だけど、一つの疑問が解消されたら、もう一つ新しい疑問が湧いてきた。

話って何だろう？ わざわざ言うくらいだから、きっと何か大事なことだよ？ よ

いことなのか悪いことなのか。よいことならいいなあ……

私は携帯をぎゅっと握りしめた。早く夜になればいいのに。一日は始まったばかりだけ。

結局、最初に約束した時間には間に合わないと彼から連絡があり、待ち合わせは一時間ずれた。

私は、書店と雑貨屋さんで時間をつぶして待ち合わせ場所のダイニング・カフェに向かった。

平日は『リフージョ』で。それが私たちの定番になっている。雰囲気がよくて、会社から近くて、お値段も手頃だから……という理由もあるけれど、オーナーの館花俊一さんが和司さんの従兄だということも大きい。

俊一さんには男兄弟がいなかったこともあって、年下の和司さんを実の弟のように思っているみたい。一人暮らしの和司さんの食事情が気になって仕方ないらしい。

ほら、和司さんは料理方面、壊滅的だから。

和司さんと俊一さんの会話はそばで聞いていると微笑ましい。館花専務との会話も面白いんだけど、和司さんは専務相手だと遠慮がなさすぎる。その点、俊一さんと頭が上がない感じが見え隠れして、和司さんを可愛いなあと思つたりもする。本人に言ったら拗ねるだろうし、手痛い逆襲がありそうなので言わないけど。

オーナーの従弟で昔からの常連の和司さんのことは、従業員のみなさんもよく知っている。そしてその付属品の私の顔も覚えてもらっている。テーブルのそばを通りかかると、みなさんさりげなく気遣ってくれ、逆に申し訳ない気持ちになってしまう。

手持ち無沙汰に見えないように、本の一つも持つてくればよかったかな。

ここに来る前にせっかく書店にも立ち寄ったのに。

手元の時計も、携帯画面の時計も、すでに待ち合わせ時間を十分ほど過ぎた時刻を指している。
 彼からの連絡はまだない。あと二十分待っても現れないようなら、こちらから電話をしてみよう。

そう決めて、携帯をテーブルの目立たない位置にそっと置いた。

つい数か月前までは何の飾りもなかった携帯に、今は三つのストラップが付いている。和司さんと旅行したときに見つけた紅い手毬と、水族館へ行ったときに記念だからと和司さんが買ってくれたイルカと、「雪乃そっくりだったから！」と爆笑しながら手渡ししてくれた出張のお土産の白ウサギ。

くたつとしたボディと、とぼけた顔のそのウサギが、私と似てるかどうかはともかくとして。触り心地がいいので気に入ってる。お腹の部分が携帯クリーナーになってるのも心憎い。

暇になるとついついそのウサギを触ったり、つついたりしてしまおうので、うっすらと汚れてきている。そろそろ洗わないとね。

和司さんを待つ時間は嫌いじゃない。むしろ好きだったりする。

待ち合わせ時間が近付くと、期待と不安でそわそわと落ち着かない気持ちになる。和司さんと出会わなければ、きっと知ることのなかった感覚だと思つくと、不安さ、嬉

しい。

だから、待つ時間をほかのことで潰してしまうのは、少し勿体ない気がする。

かといって、一時間もお店のテーブルを占拠するわけにはいかないので、寄り道をして時間を合わせてきたんだけど。

窓の外は、夕暮れの青からどんどん色を変えて、もうすっかり夜の藍色あざいろになっていた。ガラス窓は鏡のようになって店内の様子が映る。

あちこちで練り広げられる和やかな談笑。皿とカトラリーがぶつかる小さな音。その合間を流れる穏やかな旋律。

店内を漂う美味しそうな匂いにつられて、お腹がさゆるつと鳴った。
 だ、誰にも聞かれてないよね!?

慌てて、だけどさりげなくお腹を押しえつつ、あたりを見回す。

誰も近くにいな……いた!!

私のすぐうしろに和司さんが立っている。

いつの間に!? 今の音、聞こえたかな?

いや、何も言わないけど、この表情は聞こえましたって言うてるのと同じだ。

恥ずかしさで頬ほほが熱くなる。

もう少し店内が騒々しかったらよかったのに！ なんて八つ当たりをしたくなつてし

まう。

「先に何か食べててよかったのに」

何事もなかったかのように私の向かいに座りつつ、和司さんは呆れたような、困ったようなため息をついた。

そこに咎めるような色が混じっているのは、私の気のせいじゃない。

遅くなるときはいつも気を使ってそう言ってくれるんだけど、私は今まで一度もその言葉に従ったことはない。待てないほどお腹が空くなんて滅多にないから。

——今日はちよつと美味しい匂いの誘惑に負けそうで危なかっただけ。

「一人で食べるより、和司さんと食べた方が楽しいし、美味しいですからっ」

お腹の鳴る音を聞かれたのが恥ずかしくて、ついぶつきらほうに言い放つ。

ちよつと言い方がきつかったかなと反省したけれど、彼は意外な反応をした。

「え?」

「え?」

思わず私も聞き返してしまった。なんでそんなに驚いているの!?

「あ、いや、珍しく雪乃が素直というかなんというか……」

口元を押さえながら、和司さんはあらぬ方向に視線を向けている。

「私、いつもそんなに意地張ってます?」

「そうじゃなくて。いつも雪乃は俺のことを優先しようとするし……っていうか、そういうことでもなくて! ええっと」

こんな風に赤くなったり、齒切れが悪かったりする彼の方がよっぽど珍しいと思うんだけど。

「佐々木さんはこいつを動揺させるのがお上手だ」

低い声が、私たちのちぐはぐな会話の間に落ちてきた。

「俊兄!」

和司さんがその声を遮るように、声の主の名前を呼ぶ。

その慌てっぷりがおかしいのか、俊一さんは小さく声を立てて笑った。

さっきこの席に私を案内してくれたのも俊一さんだ。そのときも少しお話しさせてもらったんだけど、すぐに店員さんが彼を呼びに来て、その後は姿を見かけていなかった。

「あ、あの、さっきはありがとうございました」

「いいえ。こちらこそ慌ただしくて失礼しました」

丁寧に戻されて、私も再度頭を下げた。

「いえ、お忙しいのにお引きとめしてしまって……」

「ちよつと雪乃。なに普通に話してんの! 俊兄、盗み聞きすんなよ!」

不機嫌そうな和司さんの声が割って入ってきた。

けれど俊一さんは、そんな和司さんの様子などどこ吹く風といった涼しい顔で笑っている。

「人聞きの悪いことを言うな。お前の顔を見たら、声なんて聞こえなくてもわかるさ」人を食ったような答えに、和司さんがぐっと黙る。

「あんまり彼女を待たせるなよ。嫌われても知らないからな」いや、そんなことで嫌ったりしませんが！ 反論しようかなとも思ったけど、冗談に對して真面目に返すのも野暮やぼったい気がして黙っていた。

軽口を切り上げた俊一さんは、オーダーを取ると席を離れていった。オーダーといっても「いつも通りお任せで」なんだけどね。

「遅れてごめん」

俊一さんの背を眺めていたら、和司さんがいきなりそう切り出した。

「気にしないでください」

本当に待つのには苦じゃないし、「やっぱり今日は行けない」って連絡が入るよりずっといいし、少しの時間でも会えて嬉しい。

心の底からそう思っているから正直に言っただけなのに、和司さんは渋い顔をしている。

もしかして、私、また言葉が足りなかった？

私は長くしゃべるのが苦手なせいか、肝心なことをちゃんと伝えずに素っ飛ばしてしまふ傾向がある。

ただし、それが顕著けんちやくに現れるのは親しい人と話すときだけ。きつと言わなくてもわかってくれるって甘えが出ちゃってるんだらうな、と自分では思っている。

「あ、あのですね、和司さんがちゃんと来てくれたから、もういいって意味で、ですわね！」

「わかつてる。もつと我儘わがままを言っしてほしいっていう、単なる俺の希望だから」

「そんな……」

私は結構我儘言ってると思うんだけどなあ。でも、そう返事したら、「それは我儘のうちに入らない」なんて言われちゃいそうだ。

「そうだ！ 和司さん、お話って何ですか!？」

不利なときは話題転換に限る。

「食べた後じゃだめ？」

いつになく言い渋っている。私としては謎を抱えたままご飯を食べるより、すっきり解消してから食べた方がいいんだけどな。

もしかして、先に聞いたらご飯が喉のどを通らなくなるくらいマイナス方面に重大な話なんだろうか？

「そんなに悪い知らせなんですか？」

自分の顔から血の気が引いたことがわかる。それに気付いたのか、和司さんが慌てて首を横に振った。

「いや、それほどでもない……」

視線をさまよわせて少し躊躇ためらった後、彼は居住いすまいを正した。

「兄貴の下につくことになった」

「……いつからですか？」

「九月」

あと一か月。それが短いのか長いかわからない。

私はいつか彼は親会社へ戻るんだろうな、と前から思っていたので驚きはない。むしろ、とうとうその時期が来たんだな、という気がする。

「今日、あちらへ直行したのも、その関係ですか？」

「うん」

「そうですか」

納得したので黙っていると、和司さんが拍子抜けしたような表情を浮かべた。

「そうですかって……それだけ？」

「え？」

今度は逆に私が驚いた。

「どうして、とか、何で、って聞かれると思ったのに」

「いつか戻るんだろうって思っていましたもん」

別に驚きはしませんでしたと告げると、なぜか和司さんはがっくりと肩を落とした。

「物わかりがよすぎて寂しい」

「なんですか、それ」

彼の拗ね顔に苦笑が漏れた。

私だって寂しくないわけじゃない。今までみたいに毎日会ったりできなくなるし、週末に会う機会も減るだろう。

だけど、和司さんのキャリアを考えればいつかこういう話が出るだろうって思ってたし、出たときは「寂しい」なんて我儘わがままは言わない。

和司さんが気持ちよく移籍できるように、笑顔で送り出すって決めていた。

なのに、当の本人から「物わかりよすぎ」だなんて非難を受けるとは思っていなかった。

「急な話だったんですか？」

気を取り直して尋ねてみる。

「この前、ひとみさんのドレス選びに行っただろう？ あの日、兄貴から話があったんだ。そろそろ戻ってくる頃合いだろうって。だから急って言えば急かなあ？」

ああ、あのとき!

そう言えば真面目な顔で何か話してるところを見かけたっけ。

あのときは仕事の話なのかなって漠然と思ってたけど、そんな話をしていったんだ。

「俺ももうすぐ三十だろ? そろそろ足元を固めないと、とは思っていたんだ。で、兄貴の誘いを受けることにした。『フォアフロント・コーポレーション』は祖父が作って、父が大きくしてきた会社だ。次は兄貴が背負う。俺は微力ながらそれを支えていきたいって思ってる」

真摯な眼差しが真正面から私を見つめた。

「和司さんならできると思っています。いいえ、和司さん以外の人にはできないことだと思います」

そして本当は、頑張る和司さんをそばで支えられたらよかったんだけど、子会社の一社員では無理だ。だからせめて彼が疲れたとき、快適に休めるような場所になりたい。

ありがとう、と彼が笑うのとほぼ同時に、前菜が運ばれて来た。

瑞々しいトマトの鮮烈な赤が食欲を刺激する。

「とりあえず、食べようか? 実はかなり腹が減っててさ。この誘惑にはちょっと逆らえそうもない」

前菜の皿をちらりと眺めて苦笑いしながら、和司さんが話の中断を申し出る。

もちろん、お腹が鳴るほどの空腹を抱えた私に異論はない。

デザートはとでもシンプルな盛り付けのレモンゼリー。クラッシュユされたその上には緑のミントがちよこんと載っている。飾りはそのミントだけ。透明な器の中のうつつらと黄色いゼリーは照明をキラキラと弾きながら、涼しげに揺れている。蒸し暑い日の宵にはちよんどのいい。

すごく酸っぱいんじゃないか、という不安は杞憂に終わった。舌の上にひんやりと広がる甘みと酸味のバランスがちよんどのよくて、心地いい。暑さに疲れた体に優しく沁み渡る。

いつも和司さんは「俺の分もどうぞ」って言いながらデザートをくれるし、私もその言葉についつい甘えちゃうんだけど、今日のデザートはちゃんと彼にも食べてほしい。

だから彼の分のゼリーを彼の方に押し戻す。

「どうしたの、雪乃? もうお腹いっぱい?」

「レモンって疲労回復に効くんですよね? 和司さん、お疲れだと思っので……。食べてください」

和司さんは「そんなに疲れてるわけじゃないんだけど」と言いながらも、ゼリーを手元に引き寄せて食べ始めた。

「美味しいね」

彼の言葉に私は大きくうなずいた。すぐ食べ終わってしまったのが勿体なくて、私は少しずつ口に運んでいたけれど、和さんはあっという間に食べ終わってしまった。

正面から食べているところをじっと見つめられるのは、居心地が悪い。しかもいつもより真剣な目をしているから、なおさら気になってしまう。

食べる速度はますます遅くなってしまふけど、喋っていた方が気が紛れる。

私は彼にどうしたのかと尋ねた。

「ん？ ああ、いや……」

なんて言葉を濁されたらますます気になっちゃうじゃない。続きを、という意味を込めて彼をじっと見つめた。

「さっきの話に戻るんだけどさ、雪乃が驚かなかったことが意外だなあと思って」

「和司さんが『フォアフロント』に戻るって話ですか？」

私の問いに彼は小さくうなずいた。

「雪乃とそういう話はしてなかった……よね？」

確かにしたことはなかったと思う。今度は私がうなずく番だ。

「でも何となく、そうなんだろうなって」

そう答えると、和司さんの表情が微妙に変わった。言葉では表現しにくいんだけど、強いて言えば、何か物足りないと思っっているような、そんな感じに近い。

「何か気にかかることでもあるんですか？」

そう聞くと彼は、うーんと唸った。

「気にかかることっていうか……」

珍しく歯切れが悪い。

「我ながらガキっぽいと思うんだけど、やっぱり雪乃と職場が離れるのは嫌だなあって」
「そう言ってもらえるのは嬉しいです。けど、世の中には別々の会社に勤めながら付き合ってるカップルだって、いっぱいいるんですよ？」

「わかっている。頭でわかっても、気持ちでは割り切れないんだよ！ だってさ、俺はこんなに寂しいって思ってるのに、雪乃は全然そんな素振り、見せてくれないじゃん」

唇を尖らせてそう告げられた。その言葉に驚いて、つい彼の顔をまじまじと見てしまう。

その視線を居心地悪そうに受け止めた彼は、慌てて「もちろん雪乃と一緒にいたいってことを理由にして、この話を断るつもりは、全然これっぽっちもないけど」と続けた。

「そんなことで折角の機会を不意にしてどうするんですか。もう！」

答める声が思わずきつくなる。

冗談なんだろうけど、真面目な顔で言うんだもの。

一瞬、本気なんじゃないかって錯覚しちゃうから始末におえない。
和司さんは頬杖をついて、「だよねえ」と小さく苦笑いを浮かべた。

その日を境に、和司さんを取り巻く状況が一変した……っていうのはちよつと大げさかもしれないけど、慌ただしくなったのは確かだ。通常の業務に加えて、移籍の準備、仕事の引き継ぎで、忙殺されているらしい。

日中に顔を見る機会も減ったし、ちゃんとお昼を食べられているのかもわからないから、少し心配。

なんてことをぼろつとこぼしたら、加瀬さんにも美香ちゃんにも吉成さんにも、思いっきり笑われてしまった。

「あのね、館花さんはもういい大人なんだよ？ 自己管理ぐらいできるでしょ！ 雪乃は心配し過ぎ」

とは美香ちゃん談。私にびしっと人差し指を突き付ける彼女の脇で、加瀬さんと吉成さんがうんうんとうなずく。

加瀬さんはゆるくカールした髪を、吉成さんはさらさらストレートの黒髪を揺らしながら。

酒井美香ちゃんは私が本社に異動になって初めてできた友達。

そして加瀬ひとみさんと、吉成秋奈さんとは、ある事件がきっかけで仲良くなった。

単なる嫌がらせ——今思い返せば、ただそれだけのこと。

けれど、あのときを思い出すと胃が鉛のように重くなる。

格好がよくて、人当たりがよくて、そして仕事もできる。そんな男性がモテないわけがない。

当然、和司さんに憧れる女性はたくさんいた。

なのに、彼が選んだのは大した取柄もない私だった。

そうなれば腹を立てる女性だっている。

そういう中の一人、深山さんという女子社員が思い余って極端な行動に出ってしまった。彼女は盗撮写真付きで「佐々木雪乃が二股をかけている」という根も葉もない噂を流した。

それがまたたく間に女子社員の間にも広まって、距離を置かれたり、陰口を叩かれたり。その辛かった毎日を支えてくれたのが、この三人。

そのときから、私たち四人は先輩後輩という立場や部署を越えて、大の仲良しグループになった。

あれは本当に嫌な事件だったけれど、でも友情を深めるきっかけにもなったので、簡単に切り捨てることもできない。

ただ、あのときみんながいなかったら……って考えると、今でも背筋が寒くなる。あの頃は和司さんのことが全然信じられなくて。

とにかく迷惑だけはかけたくないと思って、彼から逃げ回ってばかりいた。

振り返ってみれば、陰からずっと見守られていたんだってわかるけれど、当時はそんなことも知らなくて。随分と彼を苛立たせたと思う。

だけど、彼は一度も私を急かそうとはしなかった。逆に「したいようにすればいい」って言うてくれて。あの頃の私は今よりはるかに頼りなかったはず。

それでも彼は信じてくれたんだよね。改めて、和司さんの懐の深さ（ふとろ）を思った。敵わないなあ。おそらく、これからもずっとずっと敵わないんだろう。

休日くらいは、とにかく和司さんにゆっくりしてほしい。だからその週末は、出かける計画も立てず、直接彼の家に向いた。

駅まで迎えに来ると言う和司さんを何とかなだめ、最近やっと通いなれてきた道を辿る。

迎えに来るくらいなら、その分休んでほしいとお願ひしたら、電話口の彼は少し不満そうだった。本当に過保護もいいところだ。

保護されている当の私がこんなこと言えた義理じゃないけど、それはもう呆れるくら

い過保護。

途中で少し脇道に逸れて、立ち寄ったレンタルDVD屋さんで大量のホラー映画を借りた。今日から明日にかけてホラー祭り開催です！ 夏にはちよどいいでしょう？ タイトルはさつき電話で聞いた和司さんの希望半分、私の希望半分。

本当は食材も買って行きたかったんだけど、それは諦めた。なぜか和司さんは一緒にスーパーに行きたがるから。和司さんの家にお邪魔するときは大抵、昼食、夕食、翌日の朝食、そして昼食あたりの分まで買い込むので私一人では持ちきれないほど大量の荷物になる。だから一緒に行きたいという和司さんにいつも甘えてしまっている。

付き合ひ始めた頃は、スーパーなんてほとんど行かないと言っていた。初めてお泊まりした日に行ったショッピングモールの食材売り場では、かなり所在なげで、実はひそかに可愛いと思ったくらいだ。それが最近では店内で浮くこともないし、調味料をうっかり切らしたときや買い忘れがあるときは、一人で買いに行ってくれくらいに成長してる。

もうちよつとしたらお料理も……と大きな野望を抱いているけど、そっちの方はまだまだ前途多難だ。こと料理に関しては、和司さんは驚くような失敗をすればかりいるから、できないっていう思い込みに縛られている面があるんじゃないかな。

料理以外はなんでもそつなくこなしちゃうから、一つくらい苦手なことがあった方が

可愛い。でも自炊できた方が健康にいいしなあ。
 ただ、これからしばらく忙しい日が続くだろうし、今のところは自炊なんて夢のまた夢よね。

日持ちするものや、冷凍できるものを作り置きしておこうかな。

なら、今日の食材は多めに……。でも、あんまり多く作っても迷惑かなあ？ 本当は毎日、作ってあげられればいいんだけど。

さすがに毎日通うわけにも行かないよね。一緒に住めたら解決するんだけどな。……ん？ 一緒？ 一緒!?

頭の中に「同棲」とか「結婚」なんて単語が乱舞し始めたので、慌ててそれを振り払ったわ、私っては何をそんなに浮かれてるわけ！ 落ち着け、落ち着け自分。

付き合ひ始めてまだ三か月くらいだよ!? こんな先走った妄想してるのがばれたら、和司さんにも呆れられちゃうじゃない!?

一人で赤くなったり青くなったりしている間に、マンションに到着。

和司さん呼び出す前に、動揺した気持ちを落ち着かせるため、一、二度大きく深呼吸。エントランスで部屋番号を入力して、呼び出しボタンを押す。

頬が熱いから、きつとまだ顔は赤いだろう。部屋に着くまでに落ち着きますように！もし駄目だったら、外が暑かったからって誤魔化そう。今が夏でよかった。

立ち読みサンプルはここまで

「はい?」

スピーカーから和司さんの涼しい声が流れてきた。

聞きなれた声。それもスピーカーを通してだからくぐもった粗い声。心臓がどきりと跳ねた。

「あ……」

声が詰まって名乗るのが遅れた。

「雪乃?」

一音だけで私だとわかってくれて、嬉しくなる。我ながら単純だ。

「はい!」

「ん。鍵あけるよ」

言い終わったタイミングで、ドアからカチャリと鍵の外れる音がした。私は慌ててドアに歩み寄り、それから周りをざっと見回した。不審な人はいないかどうか確認したうえでドアを開ける。

ドアが閉まり、鍵がかかる音を確認してから部屋へ向かった。エレベーターを待つ時間もどかしい。心の中に残っている冷静な部分が、そんな私の余裕のなさを笑っているけど、これでも一応恋する女なので。そういう冷静な部分が上げる笑い声は無視。

ああ、早く和司さんの「いらっしやい」を聞きたい。機械を通した声じゃなくて、彼